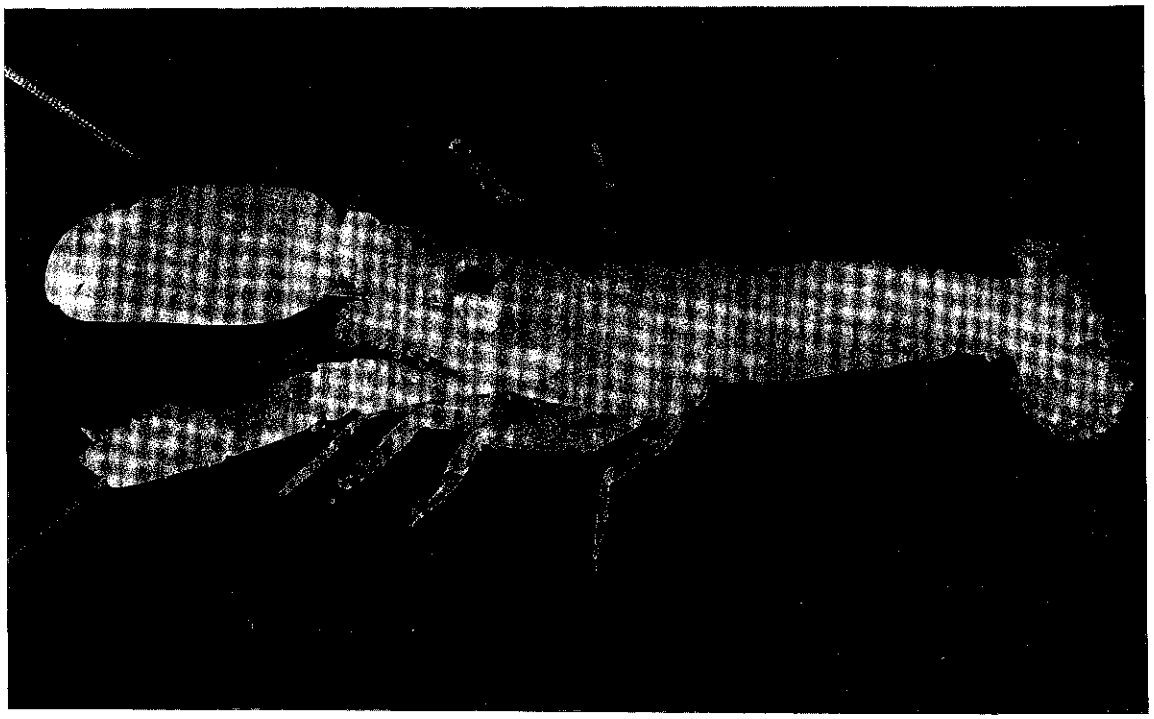
ISSN 1341-6928

串本海中公園
マリンパビリオン

1998. 8. Vol. 27, No. 8



アカマダラテッポウエビ
***Alpheus barbatus* Coutière**

扁平な大鉗を持つことから、テッポウエビ属のテッポウエビ群に含められているが、本種は自由生活を行い、同群の多くの種に見られるようにハゼ類と共生することはない。体長25mmほどの中型種で、乳白色の地に赤色の斑模様を持つが、写真のようにこの模様が不鮮明な個体もある。額角は短く痕跡的で、大鉗掌部上縁には切れ込みがあり、雌雄共に小鉗指部に長毛が密生する。

模式産地はジプチでインド・西太平洋域に広く分布する。本邦でもサンゴ礁域の潮間帯でよく見かける種で、串本では水深8mの転石下より、写真の体長約25mmの雌1個体が採集されており、これは沖縄以北では初めての記録となる。テッポウエビ科。 K. N.

串本海中公園センター

ANTHOZOOLOGI A（71） 八放サンゴ類　その2

岩瀬 文人

前回の続きで、ウミトサカ目の第2亜目、根生亜目から。（各部の名称はVol. 27,P. 34参照）

Suborder 2. Stolonifera Hickson, 1883

根生亜目

従来、根生目とコエダ目に分けられていたグループで、走根と呼ばれる紐状又は膜状の基盤からポリプが直接立ち上がって群体を形成する。走根は海底の岩の上や海藻の表面上に延び広がり、紐状のものでは分岐した走根が互いに癒着して網目状になることもある。走根から直接立ち上がったポリプを一次ポリプといい、一次ポリプの体壁から出芽したポリプを二次ポリプという。群体が一次ポリプのみから構成されているものは被覆性の群体になるが、二次あるいはさらに高次のポリプを持つものの中には樹状の群体を形成するものがある。走根は通常基質上に展開するが、中には隣り合った背の高いポリプの体壁間を管状の走根が連結したり、膜状の走根が多層構造になったりする場合もある。ポリプと走根の表面は角質の外皮で覆われており、ハナゴケ科を除く種では外皮の中に石灰質の骨片が分布する。骨片は有棘紡錘形のものが多いが、盤状の骨片が「よろい」のように群体表面を覆ったり、甚だしい場合には完全に癒着した骨片により中空の骨格をなすこともある。群体の構造及び骨片の形状や分布状況などによりハナゴケ科、ウミヅタ科、クダサンゴ科、ハネコエダ科の4科に分けられる。

Family 1. Cornulariidae Dana, 1846

ハナゴケ科

紐状の走根上に複数のポリプが並んで群体を形成する。ポリプは全て走根上に立ち、二次ポリプを生じることはない。骨片は全く分布しない。群体の表面はごく薄い角質の外皮で覆われている。ポリプ及び群体は小さく、目立たない。ハナゴケ属1属のみからなる。

Genus 1. *Cornularia* Lamarck, 1816

ハナゴケ属

世界に5種が知られており、日本からは相模湾、紀伊半島から3種が知られている。（Vol. 12, No. 3, 6表紙）

Family 2. Clavulariidae Hickson, 1894

ウミヅタ科

紐状、網目状、膜状の走根の上に複数のポリプが並んで群体を形成する。走根上に直接立つ一次ポリプのみからなる種と二次以上のポリプを生じる種がある。ポリプは骨片が殆ど又は全く分布しない頸部によって、頸部より上で触手のある花頭部と頸部より下で走根につながっている花柄部に明らかに分かれていて、花頭部は花柄部の中に退縮する。ポリプ花柄部と走根の表面を覆う外皮には骨片が分布している。多くの種では花頭部にも骨片が分布する。ポリプは基盤上を覆う走根上に立ち、ポリプの背が高いときには隣り合ったポリプの体壁が管状の走根によって連結されることもある。群体の構造などによりウミヅタ亜科、アミゴケ亜科、コエダ亜科、ハナノエダ亜科の4亜科に分けられる。

Subfamily 1. Clavulariinae Bayer, 1981

ウミヅタ亜科

ポリプは背が高く円筒形又はラッパ形で、体壁から二次ポリプが出芽することはめったにない。骨片は有瘤棹形、有棘紡錘形、十字形などで、互いに癒着することがある。4属

Genus 1. *Clavularia* Blainville, 1830

ウミヅタ属

ポリプ花柄部の骨片及び走根の骨片は癒着しない。過去に90種以上が記載されているが、多くは他属の誤認や不完全な標本による誤同定で、実際には20～30種程度。日本からは10種が記録されている。（Vol. 12, No. 7表紙）

Genus 2. *Bathytelesto* Bayer, 1981

ポリプ花柄部の骨片及び走根の骨片は互いに癒着している。ポリプの胃腔は上端から基

部まで完全に中空。一次ポリプの体壁から二次ポリプが出ることがある。世界に2種、日本には産しない。

Genus 3. *Rhodelinda* Bayer, 1981

ポリプ花柄部の骨片及び走根の骨片は互いに癒着している。ポリプの胃腔は、上部は中空だが下部は中膠性の組織が充満していて中実。南太平洋南部から1種のみが知られている。

Genus 4. *Scyphopodium* Bayer, 1981

ポリプ花柄部の骨片及び走根の骨片は堅く癒着して多孔質の板状になる。ポリプの胃腔は、上部は中空だが、下部は8本の縦管がある中膠性の組織が充満していて中実。アイスランド近海から1種のみが知られている。

Subfamily 2. Sarcodictyiinae Bayer, 1981

アミゴケ亜科

ポリプは短く、走根の中に退縮して殆ど平らになるか、低い円錐形又は円筒形の莢を形成する。5属

Genus 1. *Sarcodictyon* Forbes, 1847

アミゴケ属

走根の骨片及び莢の骨片は小さく、0.5mm以下の4、6及び8放射形で、癒着しない。ポリプ花頭部にはほとんど骨片がない。世界に7種、日本産1種。(Vol. 12, No. 1, 2, 10表紙)

Genus 2. *Cyathopodium* Verrill, 1868

走根の骨片及び莢の骨片は、堅く癒着して小さな孔が多数ある板状になる。世界に2種、日本には産しない。

Genus 3. *Scleranthelia* Studer, 1878

走根と莢は多数の盤状骨片に覆われて敷石状になる。ポリプ退縮時に莢の開口部に蓋は形成されない。世界に2種、日本には産しない。

Genus 4. *Tesseranthelia* Bayer, 1981

莢は数枚の非常に大きな板状骨片に覆われており、走根は半筒形の非常に大きな骨片により覆われている。ポリプ退縮時には莢の開口部は三角形の骨片による蓋が形成される。カリブ海とインド洋から各1種、日本には産しない。

Genus 5. *Trachythela* Verrill, 1922

走根の骨片及び莢の骨片は長さ1mm程度のやや曲がった大きな紡錘形で、癒着しない。ポリプの花頭部にも多数の大きな紡錘形骨片がある。世界に1種、日本には産しない。

Subfamily 3. Telestinae Bayer, 1981

コエダ亜科

ポリプは背が高く円筒形で、体壁から二次ポリプが出芽する。一次ポリプは長く、単軸分枝により樹状や扇形の群体を形成する。4属

Genus 1. *Telesto* Lamouroux, 1812

コエダ属

ポリプ花柄部の骨片及び走根の骨片は太い紡錘形。ポリプの胃腔は上端から基部まで完全に中空。一次ポリプの体壁には多数の溝道がある。世界で約 20種、日本では 5種が記録されている。(Vol. 12, No. 11表紙)

Genus 2. *Carijoa* Müller, 1867

ポリプ花柄部の骨片及び走根の骨片は細くて分枝するものが多く、しばしば互いに絡み合ったり癒着して小塊になることがある。ポリプの胃腔は上端から基部まで完全に中空。世界に2〜3種、日本には産しない。

Genus 3. *Paratelesto* Utinomi, 1958

ベニコエダ属

ポリプ花柄部の骨片及び走根の骨片は太い紡錘形。ポリプの胃腔は上端から基部まで完全に中空。一次ポリプの体壁には1環列の溝道がある。2種が記録されており、いずれも日本産。(Vol. 12, No. 8表紙)

Genus 4. *Telestula* Madsen, 1944

ポリプの胃腔は、上部は中空だが下部は中膠性の組織が充満していて中実。世界に4種、日本には産しない。

Subfamily 4. Pseudocladochoninae Bayer, 1981 ハナノエダ亜科

ポリプは背が高く円筒形で、体壁から二次ポリプが出芽する。分枝は仮軸分枝で、ジグザグ形の群体を形成する。1属。

Genus 1. *Pseudocladochonus* Versluys, 1907

ハナノエダ属

1種が日本から記録されている。 (続く)

第25回　マリンスクール開催

今年も恒例のマリンスクールが7月22日から7月24日の日程で開催され、県内3つの中学校から8人の生徒が参加しました。参加者は少なかったのですが、それだけに一人一人充実したスクールになったと思います。また、2日目の夜から雨が降りだし海が荒れたために、グラスボートに乗れないなど、不運もありましたが、夜の海中展望塔でサンゴの産卵が見られるなどラッキーなこともありました。以下に参加した生徒の感想文から一つを紹介します。

「マリンスクール」

潮岬中学校1年　凩　理紗

7月22日、待ちに待ったマリンスクール。開校式の時、私は、8人しか来ていなかったので、とてもびっくりしました。女子3人、男子5人です。もっときてると思っていました。マリンスクールは、キャンプです。キャンプは、テントを造り食事も皆で協力すること、だと思います。食事の準備、野菜の多さにびっくりしましたが、食べるとなると、ぺろっと皆で食べてしまいました。夜の海中展望塔に入るのは、初めてでした。サンゴの産卵が見えるのは5/100だと先生は、言っていました。でも、その5%のかく率で、サンゴの産卵が見えました。小さな小さな、あわのつぶのようなものでした。それを、小さな魚が食べに来ていました。あと、イセエビもいました。海で見るのは初めてです。次に楽しかったのが、7月23日にやった、魚にえさをあげたことです。エビ、アジ、魚肉、などがえさです。私達がえさをやる所は、水族館の中でも一番大きい、大水そうです。熱帯魚がたくさんいました。魚肉を水そうにつけえさをつぶしながらやると、待ちきれない魚が、私の手をつんつんとつついてきます。とてもかわいいです。次に、大きな魚ばかり入っている水そうに、えさをあげました。見たことのない大きな大きな魚がいました。少しこわかったです。でも、これよりもっと、はく力があったのが、大水そう！中でも、ナポレオンフィッシュが大きいです。でも、どこから、こんなにいっぱい魚がいて、共食いをしないかなぁ～と思います。えさをあげるのも大変ですが、水そうをそうじするのは、もっともっと大変だと思います。また、魚達にえさをあげたいです。一番こわかったのが、サメです。イカをあげると、次々に集まってきます。ちょっとこわかったけどおもしろかったです。7月24日のウミガメの観察。これもまた、初めて、カメをさわりました。のびたり、縮んだりする所は、やわらかい。やっぱりよく動く所はやわらかいです。コウラはかたい。コウラはウロコがついていました。こわいような、かわいそうな感じがした、首が2つあるカメ。人間にもあるけど、動物の中にもあるなんて知らなかった。人間なら病院があって、何とかできるけどカメには病院がないので土から出れないし、死んでしまう。どうしてカメにもこんなことがあるのかな？

マリンスクールに来て、本当によかったと思います。めったにできない体験もでき、友達もでき、本当に楽しかった。サンゴの産卵シーンが、とても印象的です。えさも、またやりたいです。なにもかも、また全部このメンバーでやりたいです。私は中1で1人しかいなかったけど、皆、やさしくしてくれたし楽しかったです。先生も、ユーモアで個性があっておもしろかったです。また、マリンスクールがあったら、参加してみたいです。



海中展望塔での観察

1998年度　夏期実習生思考

日本海洋科学専門学校 水産増殖学科　2年
村上 陽一

魚に餌を与える時は栄養のバランスを考えて彼ら好みの餌もそうでない餌も与えなければならない。特にミノカサゴは空腹の時はどんな餌でも食べるが、飢えが癒えてくれば好き嫌いを言い始める。彼らは好みの餌は一口で食べるが、そうでない餌は見向きもしない。また、さっき食べた餌を次も食べるわけではなく、全く異なった種類の餌を求めることもよくある。そう彼らにも私たちと同じように餌の好みがあるのだ。

例えば餌を与える時、嫌いな餌をまず与えて好きな餌を後から与える。こうしないと後から来た嫌いな餌には手をつけずに好きな餌を待ち続けるのである。もしかして彼らは私がどんな餌を持ってきているのかさえ知っているのかも知れず、嫌いな餌の口直しに私が好きと思っている餌を食べているだけかも知れない。私たちのように彼らにも食べ物の好みがあるということに、思わず笑みを浮かべてしまう私である。

東海大学海洋学部水産学科増殖課程　3年
末廣 雅史

僕は、串本海中公園に来て1ヶ月近く実習をした。ここで色々な貴重な体験をしたが、中でも、餌やりは面白かったことの一つである。2日に1回の餌やりの日は、アジを三枚におろしたり、アジやオキアミなどを使ってミンチを作ったり、水槽に合わせて餌を振り分けたりしなければならない。このように、餌作りは大変な仕事であるが、魚や無脊椎動物たちに餌をやり始めると熱中して疲れを忘れてしまう。大水槽での餌やりは他の水槽よりも迫力があるし、僕が近づくと餌をねだりに来るイシガキフグ、アジを丸ごと飲み込むクエ、小水槽のカニたちやキサンゴなど、それぞれに特徴があっておもしろい。フグやカワハギたちには特に愛着がわいて、つい目の前に餌を落としてあげたりした。ここで経験した事は、色々なところで役立てていきたいと思う。

高知大学農学部栽培漁業学科　2年
伊藤　直也

アッという間の42日間でした。退屈な大学の授業と違い、忙しく、バラエティーに富んだ毎日でした。その中でも、スキンダイビングを教えてもらい、串本の海を実際に見ることができたということが、一番の経験になりました。眼下に広がるサンゴの仲間、そこに泳ぐ色とりどりのチョウチョウウオやスズメダイの仲間などの沢山の魚、今まで魚にあまり興味のなかった僕でも、図鑑で調べて、数多くの種名を覚えることができました。

それから、夜潜った時に見た夜光虫は最も印象深いものでした。薄暗い海の中、マスクや手に当たったり、フィンの水流の刺激によって青白く光り出し、まるで星空を泳いでいるようでとても感動しました。

この実習での経験を生かし、自分のやりたいことを見つけていきたいと思います。

水産大学校　生物生産学科　2年
大野 恭裕

山口県内水面漁業センターでの研修を終え、串本海中公園での実習。共に取水ポンプによる生海水を使用し各水槽に分配するといった構造では同じだが、前者は活かす水槽であるのに対して、後者は見せる水槽であることで根本的に異なる。基本的な違いは、前者では四季に応じてその時期に合った生き物を飼育するのに対し、水族館では長期の飼育ができて初めて目的が達成されることである。

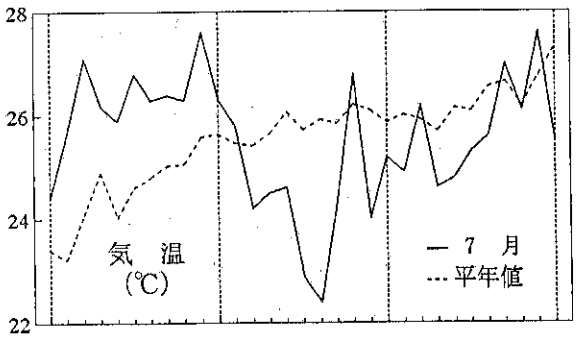
ここ串本海中公園での実習を通じて、私の描く水族館のもう一つの仕事、それは、限りある資源を大切にして欲しいとアピールすることである。そうでなければ、ここの海はもちろん、串本海中公園もなくなってしまうのだから。実習を始めてこの半月間、頻繁にタイドプールに足を運び、そこの生物を捕ってきたが、無惨にも死んでいく現実、餌を食べることを知らない魚は、痩せ細りそして死ぬ。魚が死ぬたびに、私自身にも言い聞かせてきた言葉だ。

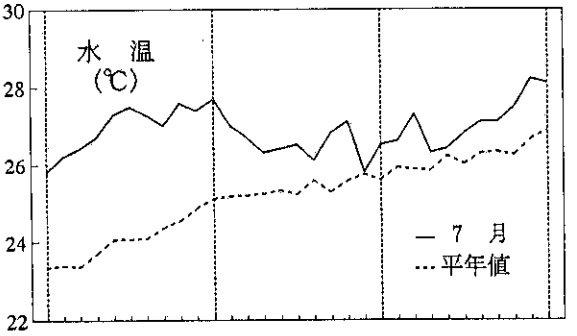
錆浦の海から

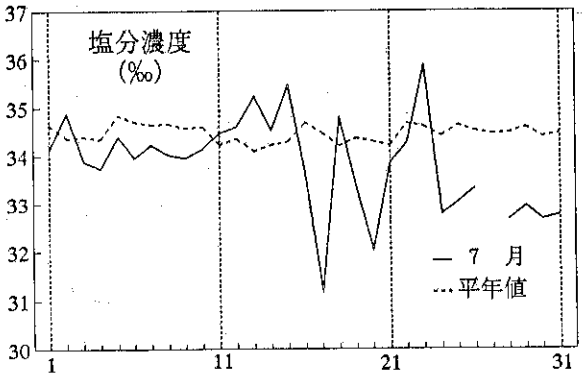
宇井晋介

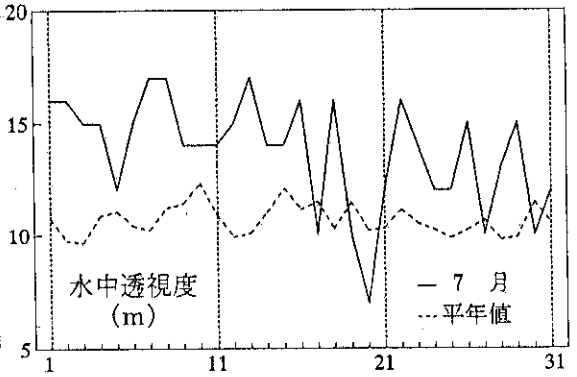
7月 平均値	気温　25.5 ℃	水温　26.9 ℃	塩分　33.8 ‰
	透視度13.7 m	月間降水量　415.4 mm	

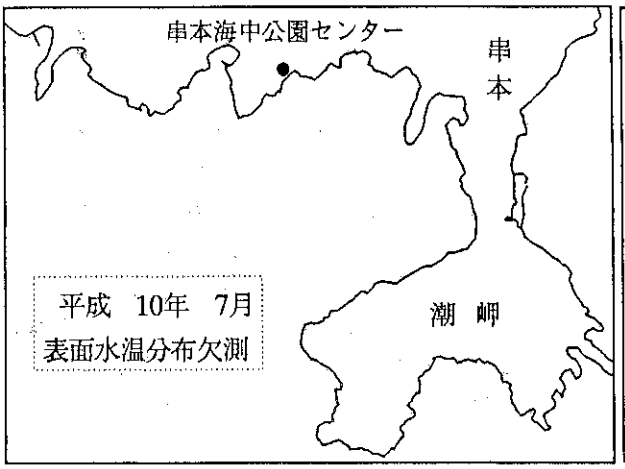
北日本は冷夏となりしばらくぶりの米の不作が伝えられる。しかし西日本それも太平洋側は炎暑の夏となり、海の中もその影響が見られる。水中を覗くと、いつもなら青い水と黒々した岩礁が目に入るが、今年の光景は海と言うより、池か沼の底を覗いているようである。高い水温と強い日射のため、海底にラン藻が一面にはびこり、黄色味を帯びて見えるからである。水槽内のイソギンチャク類の中にも、褐虫藻が抜け体が真っ白になってしまったものが現れた。お客さんを案内すると必ず「きれいなイソギンチャクですねえ」と感心して下さる。当方も言いそびれて、ついあいまいな返事をしてしまう。道路がユラユラと陽炎のようにゆらめいて見える日中では、海面の水温は優に30度を越えているだろう。それでも水深20mも潜れば、そこはひんやりと冷たい別世界。つくづく我々は、海の生き物に比べて厳しい世界に住んでいるのだと実感させられる。











マリンパビリオン Vol. 27, No. 8 通巻 320号
1部 50円（年間購読料 1,500円）
印刷日　平成 10 年 8 月 20 日
発行日　平成 10 年 8 月 25 日
口座番号：00990-9-41351
口座名称：串本海中公園マリンパビリオン
編集兼発行人
〒649-3514 和歌山県西牟婁郡串本町有田1157
（株）串本海中公園センター
電話　0735（62）4875
FAX　0735（62）7170
印刷所
坂本印刷
串本町串本2481　Tel: 0735（62）0895